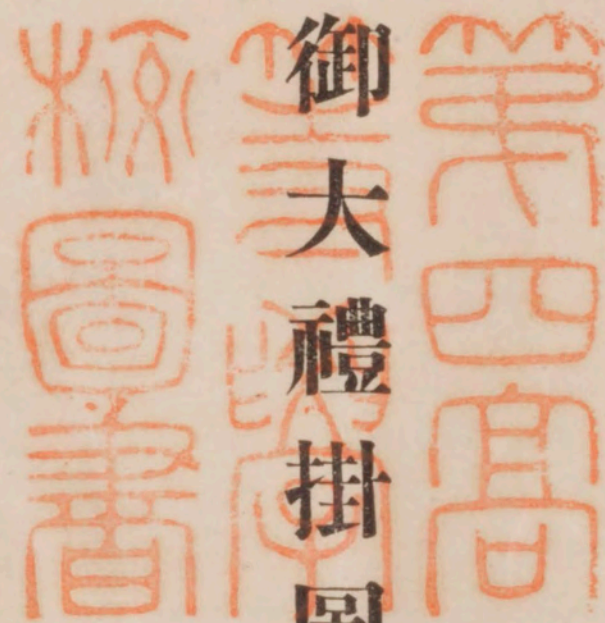


4 門
10 類
386 號

內省御用掛
八禮使囑託
文學博士 關根正直先生謹撰
土佐派畫伯 秋園 石本永平先生謹寫

昭和御大禮掛圖解說



東京 六合館發行



正誤表

(頁)	(行)	(誤)	(正)
二	一	御殿の	ノ下「真中の」三字ヲ脱ス
一二	七	御筆蹟	ノ下「を願ふ由」ノ四字ヲ脱ス
一二	一一	吾必ず	われかなら
二一	七	閑づ	閑し
二一	八	袂	袂
二三			袂

第四掛圖左下女官ノ傍注ニ「禪ヲ加ヘ」ト記シタノハ「禪ヲ加ヘ」の誤字デス此ノ外ニモ傍訓ノ誤植ヤ落字モ少々アリマスガ取り急イダ爲ニ校正ノ不十分デアツタ事ヲ謝シ且御諒察ヲ願ヒマス

昭和御大禮掛圖解説

文學博士 關根正直 謹撰

第一圖 御即位禮紫宸殿の儀

此の御儀式は十一月十日の午後に行はれますが、先づ紫宸殿は古代風の御建築で、總體檜の白木造り、御屋根は檜皮葺、御床は板張で、御疊は敷かれてない。廣さは東西九十尺、正面の柱と柱との間一丈、南北六十尺、中央を身舎と稱し、前を南廂、後を北廂と稱す。左右を東廂、西廂と稱するは南北に比べれば甚だ狭い。周圍に簀子とて縁側あり、勾欄とて欄干を廻し、正面

に横三丈十八段の階、東西にも九段の階がある。又御殿の階の東西に櫻と橋とが一本づゝあつて、これを世に「左近の櫻」「右近の橋」と申す。昔の御儀式に左近衛の武官は櫻の前に、右近衛の武官は橋の前に陣列したからの稱であります。

紫宸殿の裝飾は、先づ南榮と申して、正面の簷の下、長押の上の所に帽額と云ふ幕が懸ります。この幕は白地の錦で、中央には金色の日輪と、その左右には一面に五色の瑞雲の像とが現はされてゐます。それから身舎の中、中央には南向に黒塗朱欄の繼壇が置かれます。これは高さ三尺ぐらゐ、横二丈で、左右と後との三方に階段があり、その上にまた高さ一尺ばかりの壇が据ゑられます。その上に所謂高御座が立つのであります。高御座の八角形の屋根の頂上には大金鳳一翼、八角の棟の端に八つの小金鳳を取りつけ、又八方の御屋根の軒端には數面の鏡と白玉を簞入して唐草形を彫鏤

した金銅の飾をつけ、棟下の八角には玉旛と云つて、玉を統貫した小旛のやうなものゝ懸ります。御屋根全體は黒塗御柱は朱塗で、八面に濃い紫の小葵綾織の帳帷を懸け、外部の上の方には、又唐草形の彫刻のある金屬の帽額が懸つて居ます。

眞中の高御座より東の方に寄せて、皇后陛下の御座所が設けられます。これを御帳臺と申します。黒塗三層の繼壇で、朱塗の欄干から、左右後と三方に階段のあること、又壇上に八角形の御帳臺を据ゑられ、薄紫の御帳帷を垂れさせられることなど、略高御座と同じやうであります。唯寸法が總體に少し小さく、御屋根の頂上に唯一つの金の靈鳥を据ゑられるだけで、八角の棟の端は蕨手に作られ、玉旛の裝飾その他は、大略高御座と同様であります。

この南庭の櫻の南に日像轟旛といふ御旌が樹てられます。轟は金の絲

を飾にして垂れたもので、古は黒い馬尾の毛も用ひたといひ、近世は清い
芋を黒く染めて作られました。が今は絹糸に金箔を置かれるのでありま
す。これを竿頭につけ、その下に赤地の錦の雲形の模様のある旗の上部に、
金色の日像を繡つたのを掛けて、黒塗の四柱の杵に樹てられます。

其の南には頭八咫鳥形大錦旗(神武天皇の故事第三圖の解説参照)とい
ふ御旗が樹られ、又右近の橋の南には月像(蘇我氏其南に靈鷲形大錦旗神武
天皇の故事第三圖参照)といふ御旗が立てられ、それから其南には東西兩
側共菊花章中錦旗五旒菊花章小錦旗五旒立ちつゞき、又其南には東西共
に杵十本宛地に突き立てられ、東西の大錦旗の前面には萬歳旗(以上第三
圖に委しく解する)が相對して二旒立ち、小錦旗の前面には火焰臺に懸け
た鉦と鼓とが左右各三面づゝ置かれます。さて彌々御式の始まる時刻に
近く、儀仗兵が皇宮外垣の御正門の建禮門外と其東面の建春門外とに

威儀堂々と整列し、大禮使高等官が數人各門の壇下に參進して、御門警衛
の任にあたります。次に大禮使高等官左右各一人同判任官左右各六人を
率ゐて鉦鼓の前に着席し、次に大禮使高等官左右各二十人文官の装で威
儀の物(太刀、弓、壺、胡篋、杵、楯)を持て中錦旗の前面に着席し、次に大禮使高等
官左右各十人武官の装で箭を負ひ弓を持つて左近の櫻と右近の橋の前
に二行づつに整列します。右の鉦鼓を三つ宛うち鳴らすを合圖に諸員何
れも立ち、豫て御門の外の朝集所に控へて居つた文武高官有爵者外國交
際官同夫人等は式部官の案内で殿上の東廂又は軒廊に參列します。次に
式部長官次官大禮使長官次官内閣總理大臣宮内大臣と順次に南廂の西
の方に東を上にして立ち、親王諸王の各皇族殿下には高御座の壇前に立
たせられ皇族妃殿下は御帳臺の前に立たせられます。此時式部長官は出
御を報ずる爲め「ケイーツ」(警蹕)と高らかに稱へますと、諸員起立敬禮のう

ちに兩陛下は殿の後房より出御、壇の後の階段を御昇り遊ばされて、高御座及び御帳臺のうちの御椅子に着御になり、侍従は劔璽を御座の左右の案上に奉安し、御笏を奉ります。内大臣は壇上高御座の御帳の外東北隅に候し、侍従長以下文武の侍従女官等は兩壇下後方に侍立致します。天皇陛下の御服は御立纓の御冠に黄櫨染の御袍、桐竹鳳凰麒麟の御模様ある黄赤色に近き色の御袍の御束帶、皇后陛下は青色の御唐衣、御五衣、紅の御袴、白の御裳を御させられます。やがて侍従二人、女官二人は高御座及び御帳臺の東西兩階より壇上に昇り、御帳を左右八字形に擧げて座に復します。天皇陛下には御笏を正し、皇后陛下は御櫛扇を持給うて立御遊ばされます。すゝと殿上殿下の總員肅然として最敬禮を致し、了つて内閣總理大臣はしづしづと御殿の西階を下り、南庭に廻はつて南階の下に立つ時、天皇陛下には玉音高らかに勅語あり、次に内閣總理大臣は南階を昇り、御座の御前

の簀子に於て奉答の壽詞を奏し、南階を降りて左右の萬歳簾のある所まで退き、萬歳の音頭を上げ、殿上殿下の諸員相和して三たび萬歳を稱へるのであります。それから總理大臣は、又西階を昇り、元の座に復し、諸員最敬禮。侍従女官は御帳を垂れ奉り、式部官が「ヒーツ」と稱へる聲のうちに兩陛下は入御まし、司鉦司鼓の役、鉦及び鼓を撃つこと三つ、參列諸員退出、これを以て紫宸殿の儀は訖るのであります。以上恐れ多くも萬歳奉唱の光景を拜察して謹寫し奉つたのであります。尙右御式に參列すべき諸員の數は約二千名にのぼる趣きであります。

第二圖 大嘗祭悠紀殿進御の儀

大嘗祭は、悠紀殿主基殿に於て、夜半前と夜半後とに、皇祖天照大神その他の天神地祇を祭り給うので、この兩殿その外を總稱して、大嘗宮院と稱

します。其の構造を大略申すと、先づ四方の圍は高さ六尺ばかりの柴垣で、所々に「椎の和惠」と申して、椎の葉付の枝に、木綿垂懸けたのを挿し、四方の垣には真中に櫪の鳥居を立て、いづれも柴を編んだ扉が附く。之を南北東西の神門と稱し、此の外構に外門といふのがある。其の又外の正門に儀仗兵が整列します。

悠紀殿と主基殿とは、東西各別に建てられ、其の中を柴垣で隔て、神門がたつ。又此の兩御殿とも東西（正面）三間、南北（奥行）五間（一間は八尺）にして、柱も棟も棟の上のカツヲ木も、破風に交叉した千木も、皆皮付の松の木で、御縁側は竹簀子の上に、葉薦を敷かれる。四方は壁なく、疊表を張り、皮付の松の割つたので押縁をする。南面の西へよつて、半分を開き戸とし、西側の南寄の所にも入口があり、共に御簾を巻き上げ、其の内に布の幌をかける。正面は陛下の御入口である。

陛下悠紀殿に臨ませ給ふ前に、皇宮より頓宮へ著御あり。皇后宮皇族各殿下亦同じ。頓宮とは臨時の假御殿、それより陛下には夜に入つて廻立殿と申す、これも悠紀殿と相似たる御構造の御殿で、御湯浴を遊ばし御身を清め給ひて、御齋服と申して最も清淨なる織り立てのまゝの白絹の御袍を召し、御冠には御幘と申して、白絹を以て御巾子に御立纓を結んだ冠を被り給ふ。此の間に、皇族殿下以下の供奉員も服装を改められる。皇族以下勅任官まで黒袍、奏任官緋袍の別はあるが、凡て束帶で、其の上に小忌衣といふ祭服を著られます。

此の時掌典長は本殿に參つて祝詞を奏し、訖つて南階の下に候し、二人の脂燭を持つ式部官と共に、陛下を待ち奉る。脂燭とは、松を細く割つた長さ二尺程のを束ねて、油を塗つて、火を點す松明の類である。此の外に細纓の冠桃花色染の布狩衣著た火炬手は、所々に庭火を焚いて夜を照す。

さていよいよ廻立殿から本殿へ進御といふ事になると、宮内大臣式部長官御前行し奉り、かねて設けの御路を進ませられる。其の御通路には、上に霧おほひあり。下に布單又葉薦を重ね敷かれる。陛下には其の上を徒歩し給ふ。御前侍從劔璽を捧持し、御後侍從は御菅蓋といふ菅で作つた被り笠の大きな形したもので、一人がもてる。白木の長押の端に、鳳凰の如き鳥を付け、其の啄より綱を垂れて、蓋を結び止め、真中から下に引通した餘りを、二人が左右に別れて持ち、陛下の御上を覆ひ奉る。

偕その御後に、皇族殿下を始め奉り、内閣總理大臣等數多の方々が續き給ふのである。天皇陛下には、御殿の南面の方に廻り給ひ、御殿に入御一先づ外陣に御着座あらせられ、供奉諸員は、小忌の幄舎に著床される。續いて皇后陛下にも、皇族妃殿下女官等の供奉で廻立殿を出御、同じ御通路を本殿前の帳殿に入らせられ、御拜禮の後、もとの廻立殿へ、供奉の女儀がたと

共にお還りに成ります。

それから女官が十人、一種の服裝で、神饌の數々を御殿に運び入れ、いと神聖なる御親祭の式がある。委しい事は別に、『大禮要話』といふ拙著に記したから就いて見られよ。

第三圖

左方の頭八咫鳥形大錦簾と云ふ御簾は、紫宸殿の儀に、櫻の南に立ちます。これは端に戟のついた竿に懸けられるのであるが、瑞雲の模様のある錦に、黒色で頭八咫鳥を一翼刺繡した御簾で、この鳥の謂れは誰も知る通り、神武天皇が大和國に向つて兇賊を征伐し給はんとした時、山中險阻にして殆ど行き悩み給ひしに、皇祖天神より夢の御告で、一羽の八咫鳥が飛び來つて皇軍の先に立ち翔つたので、これは皇祖の御助けであると仰せ

られ鳥の行く方に随つて進軍し給ひ、遂に菟田下縣に到達し給うたと云ふめでたい故事をとり給うたのであります。

その次のは菊花章中錦旗と申して、雲形模様の錦に金糸を以て菊花の御紋章を繡つた五色の御旗の一つを圖したので、第一は青地の錦、第二は黄地、第三は赤地、第四は白地、第五は紫地の錦であります。

眞中の萬歳旗は赤地錦の上部に魚と嚴瓮とを下に金字で萬歳と繡はれる。閑院總裁の宮の御筆蹟で之を三叉の戟の竿にかけられます。この嚴瓮は太古の酒甕で、神を祭る器でありますが、それも神武天皇大和の國の賊を征伐し給ひし時、神の訓に従ひ、天香具山の埴を以て嚴瓮を作り、吉野の丹生川の上に於て天神地祇を祭り、さて祈り給ふやう、吾れ今この嚴瓮を丹生川に沈むべし、川中の大小魚悉く酔ひ浮き流るゝならば、吾必ずこの國を平定すべしと宣ひて嚴瓮を川に沈め給ひしに、須時して魚皆浮び

流れたので、天皇は大に喜び給ひ、兵を勅して、國見が岳の八十梟師を始め諸々の兇賊を平げて、終に橿原宮に即位し給ひたりと云ふ故事を採用せられたのであります。

左の頭八咫鳥形大錦旗と相對する靈鵄形大錦旗は白地に雲形の錦に、金糸を以て鵄の象を繡つたもので、やはり戟の竿に懸かります。これ亦神武天皇孔舍衛坂の戰に、賊魁長髓彦を撃たんとして連戦不利に陥り給ひし時、一天俄かに陰り、雨降り來つて咫尺を辨せず、いかゞはせんと困じ給ひしに、金色の鵄何處よりか飛び來つて、御弓の弭に止り、その光輝きて電のやうであつたので、賊軍皆目眩み、軍敗れて、天皇大捷を得給ひたる故事に據られたものであります。

その間に畫いた梓は、小錦旗の前、司鉦司鼓の後に、左右各十竿づゝ立てられる其の一本を示したのです。

頭八咫鳥大錦旗の下に立つ人は、御即位禮當日、紫宸殿の諸門に參進して衛門の本位に就くとある。大禮使高等官の服裝で冠は卷纓綾を付け服色は纓と稱する袍で、闕腋の制、錦の襦袢を腹背に當て、太刀を帶し平緒を前に垂れ、緋の脛巾をして絲鞋をはき、胡籙を負うて弓を執る姿を圖にあらはしました。

右に並んで立つのは、紫宸殿の階下、櫻と橘との前、左右に相對し、威儀の本位に就く大禮使高等官の服裝です。是れは昔の近衛次將の代りで、御殿を警衛する意であるから、服裝は凡て昔の武官の儀服である。先づ冠は後に垂るべき纓を卷き、又綾をつける。是れは武官に限る事です。又闕腋の上に赤い肩當その上に挂甲といふを蔽ひ着る。是れは小さい短冊形の薄金に鍍金したものを、細い革緒で綴つた古代の鎧を裝飾的に製したので、膝の邊近く草摺を垂れてゐるが袖はない。左右前列の十人は黒袍を着、同じ

く後列の十人は緋色の袍を着る。又前列の人々は平胡籙といふ籙を負ひ、後列の人々は壺胡籙といふものを負ふ。平胡籙は十五筋の矢を並べ挿す籙で、壺胡籙は筒形の籙に、七筋の矢を是れも列べ挿す。

この南に、又左右二十人の高等官が並び立ちます。これは冠の纓を後に垂れ、束帶佩劔で左右各四人は黒袍を着、赤地兩面錦の袋に入つた劔を捧げ持ち、次の各八人は緋袍を着て、その内四人は赤地の綾の袋に弓を入れ、たのを捧げ、四人は紫綾の袋に胡籙を入れたのを捧げ、次の各八人は纓袍を着て、その内四人は緋、四人は楯を捧げて立ちます。その又南には緋袍を着たる高等官、左右各一人が纓袍を着た六人づくの判任官を率ゐて立ち、六人の前には鉦鼓が立てられる。紫宸殿の儀の圖にある通りであります。

第四圖

左上の『御菅蓋』は、主上が廻立殿から大嘗宮へ渡御に相成る時、御道すがらさし覆ひ奉るのであるが、其御菅蓋の柄の上端には、五彩に色どつた、いと美麗な靈鳥を付けて、其の啄にくはへた綱を、御蓋の下まで通す例になつてゐる。此の靈鳥は鳳凰の如き、唐朝でいふ瑞鳥であらうが、神世ながらの簡素の御祭儀、古風な御服装などに比べて、不相應な裝飾らしく思はれるが、今に始まつた事ではない。

「青丹よし奈良の都はさく花のにはふが如く今盛りなり」白銀の目貫の太刀を下げはきて奈良の都をねるは誰が子ぞと歌はれた様に、服章の華麗な容姿の艶美な時勢を受けて、神事祭典の清淨淳素なる古風も一時忘れられ、頗る豪奢に流れたからであらう、平城天皇の大同三年十一月の勅に、大嘗會の雜樂伎人等、朝憲に乖いて唐物を以て飾とするは、禁斷を加へて許容せざれと仰せ出され、又淳和天皇の大嘗會に就いては、右大臣冬嗣

等からの奏狀があつた。其の語の中に、聖王相續き大嘗頻御す。天下騷動し人民多く弊ゆ、然れども神態は已むべからず、此度の大嘗祭には、宜しく飭を停めて弊を省かん、……一切玩好金銀刻鏤の裝飾を用ひず、……凡て清素を以て、神わざを供せん」と奏して、天皇の御嘉納を得た趣が、日本紀略に見えてゐる。清素であるべき古祭式が、如何に今様の奢靡な風に化せられたかといふ事が、能く知れる。此の御菅蓋の靈鳥の如きも、是れ亦彼の冬嗣大臣の奏狀にある玩好刻鏤の裝飾の一つが、たま／＼後世に遺つたものではなからうか。

『立纓御冠』は、天皇の御料に限る。通例冠の纓は後に垂れてゐるが、御料のは必ず曲げ撓める事をしない。近來は眞直に立て奉つた御影を拜する事もあるが、故實はさやうに直立には奉らず、少し靡かせてめさせ奉るべきである。と傳へ承る。仍て繪の様も其の心して謹寫した。

下の『御宮』は謂はゆる柳宮で、柳の木を幅五分ぐらゐる三角に削つたのを並べ寄せ白糸をかけて編んだもの。古來御冠の容器は、此の柳宮を以て本式とした。

『御幘』は御祭の時、右の御立纓を前方へ縮ね、白絹を以て結ふこと、圖の様にしたものといふ。

下に立てる束帶姿の人は、大嘗宮悠紀殿進御の供奉をする。大禮使高等官勅任の服装を圖したので、先づ通例の黒袍の上に、小忌衫とも、小忌衣ともいふ神事の服を加へる。昔は四種ほどの區別があつたが、今日は唯圖の如き一種である。これは白布に山藍の汁を以て、花鳥草木の形を摺り付けた、帶の邊までの短い祭服で、山藍を用ひるのも、畑に生じたものは不潔であるから、山中に自然と生じた草を用ひるので、清淨を尙ふからの事である。又此の衣には右の肩に赤紐といつて黒赤二筋の紐を付ける。是れは古

く神を祭る詞の中に、領巾掛クル伴ノ男手襷掛ル伴ノ男とある。禰の類の名残であるまいか。又冠に日蔭鬘といふ植物を掛けて、肩の邊まで垂れる。之を松蘿といふと書いた説もあるが、それは錯誤で、實は山中背陰の地上に生ずる石松の方だといふ。是れは神代の遺風で、太古の裝飾に外ならぬ。又圖は略したが、皇族の御女儀様を始め奉り、皇后陛下に供奉する女官たちも、唐衣・五衣・裳といふ物の具姿で、上にはこの小忌衫を加へられ、髪には銀製梅の花の小枝を心葉と稱して額に挿し、それに日蔭の糸といつて、上巻蟠絡むすびにして、前髪に掛けられる。上古は男女とも眞のひかけ草を髪にかけたのであるが、中古華美の風となつて、男子も女子も皆絲を結び垂れて飾とした。今は之を御斟酌あつて、男子は上古の風に復し、女子には猶優雅な結ひ絲の風を遺された。

女官の姿は、紅の切袴に繪衣といふを打掛け著て、上に青海波藍摺の唐

衣を重ね、又その上に褌といふを加へる。元來チハヤといふ服は、袖ゆきの至つて短いもので、之を上に着れば、下衣の袖が自然と引き上げられ、食膳調理などする者に、便利なる所から、用ひたに始まるものと思はれる。委しい考説は、曾て拙著『服制の研究』の中に記しておいた。長文なるが故、こゝには掲げ得ない。

右の服装をした女性を、昔は「采女」といつた。今は左様な稱はなく、唯女官と稱して、悠紀主基兩殿での御親祭に、供進の御膳、その外御手巾御箸等の御品を、葛宮に入れて取り運ぶ。之を神饌行立と稱す。十人のうち陪膳後取の二女官は、御親供の御介錯をなし奉るのです。委しい御作法は、拙著『大禮要話』を御覽下さい。

第五圖

『神樂の人長』は、即位禮後一日賢所御神樂の儀に出仕する舞人廿二人の、總指揮をする者。其の他の舞人廿三人が、本末十二人づつに分かれ、和琴太笛筆簾の合奏のうちに立つて舞ふので、其の根元は高天が原で、天照大神の岩窟隱の時に始まつたといふこと、誰れにも知られてゐるが、現今に傳はつた歌や曲は、一條天皇の御世更に撰定されたものである。さて當日春興殿前の神樂屋に於て奏する神樂は、最初に採物といつて、人長が榊の枝を手に取り持つて舞ふので、曲目は庭燎曲、阿知目作法、久止段拍子、榊閑韓神、次には小前張の曲で、阿知女、薦枕篠波、千歳早歌、次に明星の曲、吉々利、利得錢子、木綿作の三首、その次に朝倉其駒であつて、初めから終りまでは、六時間の長きに渉ります。

人長の装束は、卷纓の冠、白地青摺の闕腋の袍、下襲、黒半臂、單を重ね、赤大口の上に、白地の表袴をはき、石帶して太刀を佩く。手に採る榊に輪をつけ

てあるのは鏡にかたどつたものといふ。裾を長くひいて舞ふさまは、優に神々しい。

大饗第一日に行はせられる『久米舞』は、大饗には缺くべからざる歌舞の第一であります。この歌舞は、我が邦の軍歌の権輿とも申すべく、畏くも皇祖神武天皇東征の御時の御親製の御歌である。其の歌詞は、

菟田のたかきに、鳴わなはる、吾が待つや、鳴はさやらず、いすくはし、くちらさやる。こなみがな、えはさば、たちそばのみの、なけくを、こきしひるね、うはなりが、なこはさば、いちさかきみの、多けくを、こきだひるね。

菟田魁帥兄猾をお討ち遊ばされた時、道臣命に命じて大來目部にうたはせ給うた歌が、其の本になつて居る。和琴に笛筆箒を以て奏するのである。舞人は四人、何れも巻纓の冠を着け、赤抹額を額に結び、赤袍を着け、金ごしらへの劍を帶し、靴を穿いて舞ふのであつて、歌人は四人、又は五人、舞は古

は廿人が二列で舞つたとありますが、今は四人立で、劍をもつて蜘蛛を斬る状をなすのだといふ。

『五節の舞姫』も大饗第一日の御儀に、五人で、大歌といふ歌曲に合せて舞ふのです。此の曲の起原は、天武天皇が吉野の宮に御在ました時、琴を弾き給ひしに、俄かに前岫の下、雲氣忽ち起つて、恰も神女と思はしきものの、髻として曲に應じて舞ふ、獨り天驕に入つて、他人には見え、袖を擧ぐる、こと五度す。故にこれを五節の舞といふと記し傳へます。而してその歌は、をとめとも、をとめさびすも、からたまを、袂にまきて、をとめさびすも。

笏拍子と笛筆箒に合せて唱ひ之を大歌と稱する。

この圖は大正四年の御時の服裝に據りましが、今回は赤色の唐衣に、尾長鳥と、葉付の牡丹花とを、黄白で織り出された唐衣・薄青花模様、の表著色色の五衣の下に、眞紅の單を重ねられる事になると申す事ゆゑ、圖よりは

一層華やかになりましょう。長い袴は濃キといふ色で、紫に類する。公家方では若き姫君また婚儀の時などの正服の色は、皆この「濃キ」で、紅の袴を用ひない慣例になつてゐます。

『萬歳樂と太平樂』とは、夜宴に奏せられる舞樂で、樂器は羯鼓・鉦鼓・笛・簫・篳篥等で、舞人の装束は赤地の紋紗の袍・唐錦の跗掛・鶏兜・石帶・絲鞋等、甚だ美しいもので、四人乃至六人の連舞であります。太平樂の方は赤地紋紗の袍の裾を長く曳き、上に金甲を装ひ、金兜を被つて、長劔を帶し、弓の魚袋に盛りたるを左脇にかけ、右に金靱を付け、初め劔を抜き、後に矛を振つて勇ましく舞ふのです。

以上の解説は、誤つたこともありましょう。又概略に過ぎで足らぬ所は、拙著『大禮要話』を参照して御承知を願ひます。

昭和三年六月十五日印刷
昭和三年六月二十日發行

非賣品

著者 關根正直
筆者 石本永平

不許
複製

發行兼印刷者 林平次郎
印刷所 高橋印刷所
東京市京橋區新湊町五ノ一

發行所 東京日本橋六合館

宮内省御用掛 文學博士
大禮使囑託 儀 根正直先生謹述

御即位 大禮要話

四六判洋装 ● 定價 金壹圓五十錢
口繪極彩色 ● 送料 金十二錢

本書は第一に國民の了解しをらねばならぬ御大禮の本義諸儀典の由來を謹述しました

第二に登極令附式に據つて今年の御即位式や大嘗祭の次第その前後の御儀式をも委しく且わかりよいやうに説話し參考になる圖畫を多く挿入しました
かくして各學校にも各家庭にも個人々々にも普くゆきわたつて御大禮の要旨を了解されんことを望みます

右の通り著者先生の趣旨に従ひ製本装潢を高雅にし挿畫の彩色等も精美にし奉仕的の定價を以て大方に提供する事に致しました